

大学図書館におけるレファレンス機能の構造的諸要素の分析

The Analysis of Structural Elements of Reference
Functions in University Libraries

井 出 翁

Sakari Ide

Résumé

Interest in reference functions has recently become keen, and not a few comments and opinions have been presented. However, one can find much difference among them. This is because the reference functions are not clearly understood. The writer analyzes and examines the structural elements of reference functions in this article with the intention of eliminating misinterpretation.

I. Activities related to reference work

This section takes up the essential difference between reference service and reference work quoting Samuel Rothstein's theory in comparison with ALA's descriptive list of professional and non-professional duties.

Personal assistance is explained in the following four phases:

- (a) To indicate the location of library material sought by a reader, or to guide him to a proper department.
- (b) To assist a reader approach primary sources through secondary sources.
- (c) To advise a reader on what to read for the information he needs.
- (d) To offer a reader the information he needs.

Category (d) is called information service and is discussed in detail as the most important category of the widest scope.

II. Structural elements of reference functions

Theories on reference functions of Shores, Christoffers and Wilson-Tauber are outlined, and

Wyer's and Lyle's classifications by groups to serve are reviewed in this section. Adopting Lyle's classification, the writer combines two functions (action, preparation) with Shores' six functions (supervision, information, guidance, instruction, bibliography, appraisal) and analyzes reference functions in his own unique way.

(Presently at Toyo Rayon Co. Library, formerly at International Christian University Library)

まえがき

I レファレンスに関連する諸活動

A レファレンス・サービス

B 読者に対する個人的援助

II レファレンス機能の構造的要素

A レファレンス機能

B レファレンス機能の構造的要素

むすび

ま え が き

最近、大学図書館員のレファレンス活動に対する関心が非常に高まって来た。レファレンスに関する各種の研究会合が各所で持たれ、その他の諸会合でも、レファレンスに対する発言・見解がレファレンスに直接携わっていない部門・立場の人々からも活潑に従来より数多くなされている。それら個々の発言・見解の内容には著しい差があって、必ずしもすべてが大学図書館のレファレンス機能を十分に理解しているとは言えない。むしろ、大学図書館の諸条件を構成する諸要素の観察が十分に行わ

れていないための発言のように見られる。

ここに今後のレファレンス・サービスに関する諸問題の解決に多くの示唆を与えうるであろうレファレンス機能の構造的諸要素を分析し、それらに対する考察を加えて若干の当面する問題を検討してみることにする。

I. レファレンスに関連する諸活動

レファレンス機能を論じる前に、レファレンス・ワークの内包的、外延的諸活動の概念について考察してみる。

A. レファレンス・サービス

1. レファレンス・サービスとレファレンス・ワーク

Rothstein¹⁾は、レファレンス・サービスをレファレンス・ワークより高次元のものとして、レファレンス・ワークとは別のものであるという概念づけを行っている。それは、情報を探している読者に図書館員が与える個人的援助——Rothsteinは、レファレンス・ワークをこう定義づけている——と、このような業務に対する責任について、図書館員の側ではっきりした認識を持つこと、そして、その目的を果すための特別な組織を持つことがレファレンス・サービスに必要であると述べている。

Rothsteinの定義を容認した上で、以後本論を進めて行くことにする。

レファレンス・サービスには、レファレンス・ワークという行動、そして図書館においては、必然的にレファレンス・ワークを行わなければならないという責任に対する認識、「我々は、喜んで援助を与え、これらの援助が図書館員の果すべき義務の中の主要な部分であるという考え」²⁾、さらにレファレンス・ワークのために専門職員を訓練し、割当てるのが正当であるという見地から、特別の業務部門の組織化が必要である。

「図書館員の読者に対する単なる好意と思いつきの気まぐれな援助だけではなしに、図書館の基本的機能として読者に対する援助計画を持ち、それが組織化されたときにレファレンス・サービスが存在するのである。

レファレンス・ワークは、レファレンス・サービスの構成要素として存在すると同時に、単独で組織化されず、責任ある認識を持たなくても、随時、好意を持った図書館員によって「どんな目的であっても、情報を探す人に対し、館内で行う、直接的かつ個人的援助」³⁾が行わ

れることもある。この場合がレファレンス・ワークであって、レファレンス・サービスと呼ぶことはできない。

A.L.A.⁴⁾の示しているレファレンス・ワークの業務内容は、Rothsteinのレファレンス・ワークよりもレファレンス・サービスの概念に近づいているが、そこでは両者の概念の差を明確に示していない。そして、その業務内容の解説でも、レファレンス・ワークとレファレンス・サービスのことばの使用は、ある場合は同義語のように、ある場合は「レファレンスに関するサービス、または、業務」という意味にも使用している。

これに関連して、我々も「参考事務」、あるいは、「参考業務」ということばを厳密にレファレンス・ワークの訳語として用いているか、「レファレンス部門で取扱う事務、あるいは、業務」という意味に用いているのかを明確に区別することなく、不用意に使っているが、レファレンス・ワークとレファレンス部門で行う業務の内容とは必ずしも同じではない。そして「個人的援助」と呼ばれるものも、レファレンス部門以外で取扱うことがしばしばありうる。⁵⁾

A.L.A.のレファレンス業務⁶⁾におけるレファレンス政策決定の領域に属する事項を、Rothsteinは、個人的援助行動の目的を果すための特別組織——勿論そこにはレファレンス・ワーク技術を備えた図書館が含まれる——に入れていると解釈してよいであろう。

また、Rothsteinは、レファレンス・ツールは、「レファレンス・ワーク過程における必要欠くべからざる本質的要素ではない。レファレンス・ライブラリアンのツールとして、レファレンス・ワークの遂行に影響を与えるけれども、レファレンス・ワークそのものの一部ではない」⁷⁾と述べているのは、間接的援助——筆者はこの概念をレファレンスの「準備的機能」⁸⁾の領域に属させている——をレファレンス・サービスの構成要素の一つである「特別の組織」の中に含めているからであろう。

B. 読者に対する個人的援助

1. 援助の諸相

個々の読者を目当てにした援助の諸活動の範囲は非常に広いし、変化に富んでいる。我が国の大学図書館においても、レファレンス・ワークとは呼ばれていなかったが、戦前の旧い時代においても、特別の場合には図書館員の好意・善意によって読者の要求に応じて個人的援助が行われていたことを知ることが出来る。⁹⁾しかし、それらのサービスは、図書館の責任においてなされなければならないという十分な認識の上に行われたものではな

く、援助計画も図書館機能の組織の下で行われたものでもないことは、各種のデータの総合によって判断できる。

レファレンスに関連を持つ個人的援助のカテゴリーを次の四つに分けることができる。

a. 読者が求める図書館資料の所在を示し、要求に適合した部門へ導くこと。

この種の援助を行うために読者が図書館員に近づき易いようにインフォメーション・デスクを設けたり、閲覧目録の引き方や見方を助けるために掲示を出したりする。この援助の前提として、図書館員は読者に対する親切心と図書館資料についての豊富な知識を持つことが必要である。

b. 読者が二次資料を用いて、一次資料へ接近するのを助けること。この場合は、書誌・目録・索引・抄録などの二次資料の利用法についての指導が主要点になる。

上記二つのカテゴリーにおいては、読者の欲する情報はそれを検索するためのツールの用い方、あるいは情報の含まれる文献資料のある場所を指示すれば、読者自身で探すことができるという前提に立つもので、これがWyerのいうレファレンス・ワークの保守理論¹⁰⁾——Rothsteinは最小理論¹¹⁾といっている——であり、大学図書館においては、学生に対しては自己育成の教育的価値という点から「図書館の利用法を教えることは、レファレンス・ライブラリアンが行う最も重要な機能である」¹²⁾と強調されるゆえんである。

このような最小の援助さえも読者に対して——学生に対しても——必要としない、すなわち「図書館人の職能としては、目録・分類をもって万事が終るものと考えている。彼等は図書を受入し、これを書架の上に排列すれば、その仕事は完了したものと考える。なに人かがその本を使いたいならば、本はそこにあるではないか、というわけである。…インフォメーションを求めている人が来るとすれば、本はいつでも見られるようにしてあるはずである。その欲するものを自ら選ばばよい」¹³⁾というような非近代的な、伝統的な考え方をまだ持っている図書館員が日本にもいることをDownsが指摘している。このことは、レファレンス・ワークの発展を阻害する要素が図書館員自身の中にまだ残っていることを示したものである。

c. 読者各自の要求に適合した情報——学問研究のためのもの、教養・修養的、娯楽・感情充足のいずれの情報であっても——を得るために何を讀んだらよいか、と

いうことに対する援助、いわゆる読書指導(Reader's advisory service)。この場合、図書館員が直接助言を与える場合と、間接的に読書意欲を刺激し指示するための手段として図書リストを編集・配布したり、特定の主題について読者をひきつけるための本を展示したり、掲示板を使用したりする場合とがある。この読書相談と呼ばれる援助は、図書館サービス発展の過程から見れば、レファレンス・ワークが成立する以前の段階のものである¹⁴⁾が、現在では、そのカテゴリー自体が発展し、レファレンス・ワークとは別個の存在を示している。¹⁵⁾従って、レファレンスと独立した別個の部門を設けて、この種の援助を行うのが当然であるといわれた¹⁶⁾が、実際には、レファレンス部門の業務として取扱われるものが非常に多い¹⁷⁾ので、このカテゴリーの援助は、あるものはレファレンス部門で、あるものは閲覧出納の部門で取扱われている。

このカテゴリーで大学図書館における学生に対する読書指導のうち、特に大学の各学科のカリキュラムと関連のあるものについては、一般的な読書指導と別個に扱わねばならない。カリキュラムと関連のある場合、学生は、大学の教育計画に従って、研究的な読書を通じて履修する課程、学科目内容の大部分を習得して行くことを要求されている。従って、この場合、新制度の大学教育においてはリザーヴ・ブック制度を無視することはできない。教授は、カリキュラムを履修するに必要な図書館資料をリザーヴ・ブックとして指定し、学生に対し研究的読書の指導を行うのである。しかしながら、この種の読書指導、すなわち、レファレンス・ワークと思っている——勿論、誤りである——教授にとっては、図書館員がレファレンスを行うのは越権であるという議論には、一応耳を傾ける必要がある。問題は、どのような形で教授がこの種の読書指導を行っているかということである。大学の教育機能に関して、図書館が大きな役割を果たしていることを本当に認識しているか、教授が図書館員と協力し、図書館員の援助を受けて十分な読書指導を学生に対し行っているか、リザーヴ・ブック制度を実施しているか、が大切なことである。

教授が教室で自分の講義を学生に筆記させ、試験のときにその筆記で勉強させるやり方のみでは、学生の理解の程度に応じた進展を調節できず、講義は学生の理解に無関係に進められることになる。「新しい教育制度では、大学における一般教育によって、いろいろの事物についての知識ばかりでなく、事物相互間の真の関係につい

ての知識を与え、知性の涵養を計ろうとしている……のが、新しい大学教育の一つの特徴である。……第二の特徴は、方法に関してであって、教育課程の柔軟性と自学自習の重視である」¹⁸⁾といわれ、第一の特徴については一般教育にあり、後者については単位制度にあると言われる。この単位制度¹⁹⁾は、旧単位制度に対し、

(1) 卒業資格決定条件として公式化、統一化されていること。

(2) 平均能力の学生が、その学科目の学習のために費やす標準的時間から算定され、学習が教室内でされと否とを問わず、毎週3時間15週の勉学活動を1単位としている。

この場合、講義中心でなく、また教科書中心でない、資料を多角的に使用した学習が要求されてくる。図書館は、「教育計画実施のための実験室とし、あるいは、修学過程指導のための教室の延長であると考えられてくる」²⁰⁾そして図書館資料は、教室における教授の教育活動と結びつきを持ち、教育活動を拡大させる情報源の役目を果たすることになる。

この見地から、教授は図書館員の協力を得てリザーヴ・ブックを指定し、Teaching with books²¹⁾という立場を取ることができる。従って、リザーヴ・ブック制度の確立は——リザーヴ・ブック制度の実施方式などについては若干論議する余地はあるが²²⁾——大学図書館におけるレファレンス活動の「指導的機能」²³⁾と密接な関連を持って来る。

カリキュラム履修に関連のある読書指導に属する学生からの質問は、リザーヴ・ブックによって解決されるべきである。レファレンス・ライブラリアンは質問した学生にそのことを指示すればよい。

レファレンス・デスクで取扱う読書指導質問の範囲は、上記の場合を除いた教養・趣味・娯楽・実益的な読書習慣の向上を促進させる面についてのみ取扱えばよいのである。従って、大学図書館の正常なレファレンス機能を発揮させるには、リザーヴ・ブック制度を無視することはできない。

d. 図書館員が読者の要求する直接情報を提供する援助。いわゆる情報サービス (Information service) である。情報サービスは、レファレンスの援助活動のうちで最も広範囲を占め、しかもドキュメンテーションと関連をもった重要なカテゴリーである。

このカテゴリーについては、次項で考究することにする。

以上、各種の「援助」について考察したが、これらの援助を読者に対して図書館員個人で行うものと図書館組織として行う場合では、読者に対する図書館サービスの内容は質量ともに相当の隔たりを生ずるのは明らかなことである。

Wyer は、レファレンス・ワークとレファレンス・サービスを明瞭に区別していないが、レファレンス・ワークの定義を表現するために「解明する」(to interpret)ということばを用いたが、「解明」という方が、「援助」ということばを用いるよりも、レファレンスを表現するに正確で十分なことばであるといっている。²⁴⁾ Wyer は、「解明」ということばの内に組織化されたレファレンス活動、すなわちレファレンス・サービスの次元の必要性を主張していたと解釈したい。

2. 情報サービス

情報サービスの特色は、利用者に情報がのっていきそうな資料を供給するのではなくて、情報そのものを与えることである。情報サービスは、「レファレンス・サービス中、最も変化に富み、最も論争の余地のある局面と呼ぶことができる」²⁵⁾といわれている。

情報とは、一体何であろうか。情報とは

(1) 他から伝達され、または、個人の研究調査によって得られた知識。

(2) 特殊なできごと、状態に関連のある知識、あるいはニュース、勧告のようなもの。

(3) 統合された一連の思想、知識でなくて、伝達、あるいは、利用されるために準備されている事実などのことで、その内容的なものを意味する。

(4) 何らかの形式で伝達できる状態にある特殊な事実・主題、あるいは事柄に関連する知識。ということができる。²⁶⁾

情報サービスは、これらの知識、ニュースなどを伝達する働きを示しているが、情報の質的内容の相違によって、方式にも相違が起きてくる。

情報サービスは、次のような相に大別できる。

a. 利用者の特定の要求に対して情報を与えるとき、記録された資料によらないで、図書館員が直接情報を提供する場合。

これは図書館および図書館利用に関連する情報の案内で、次のものが含まれる。

(1) 閲覧目録の利用についての助言。

(2) 閲覧目録から資料を選ぶ時の助言。

(3) 利用者に対し、レファレンス・ルームおよび図

書館で利用できる資料・援助の内容、範囲についての助言。

- (4) 図書館利用規程や利用上の諸手続きの説明。
- (5) 大学のキャンパス内の事柄および大学近辺の案内に関する情報提供。

などである。²⁷⁾

この種のサービスは、普通、インフォメーション・デスクで行うのであるが、インフォメーション・デスクを置かない場合は、出納台、あるいは、レファレンス・デスクで取扱うが、レファレンス質問とは別に扱われる。それは館員であれば誰でも答え得る事柄であり、専門的援助を必要とするものではないからである。

しかし、この種の質問は、質問の型、質問内容、質問の出し方によっては、次のカテゴリーに関連を持つものもあるから、必ずしもレファレンス質問と別のものだと断定できないものもある。

b. 読者の要求する特定の事柄・事実・主題に関する情報を調べるために、直接情報でなくて、それらの情報が含まれている資料を指示・提供する場合。

c. 読者の要求する特定の事柄・事実・主題に関する情報が、一次資料に関するものであるときに書誌、目録、索引、抄録、書誌のガイドブックなどの二・三次資料を根拠として、一次資料を指示・提供する場合。

この二つの領域は、性格が異なるもので、前者は、直接情報を与えずに資料で提供するものである。これが、現在のレファレンス・ワークで一番取扱われている形式であるが、このような情報の与え方でよいかどうかは疑問である。利用者が本当に方向を示すだけのものを要求し、提供されたものだけに満足しているのか、あるいは、図書館員が自己の提供する情報に自信がないために情報でなくて、情報の含まれている可能性のある資料を指示・提供しているかもしれないからである。Rothstein²⁸⁾ は、図書館員が自信がなく、不安な気持ちを持っているために、一線を引いて自己の立場からサービスを規定しようとしていると指摘している。

「資料を指示・提供する」という形式においては、b項とc項は同様に見えるけれども、内容的にはかなりの相違がある。後者は特定の問題のための参考文献に関する情報を提示するということになるので、この相を書誌情報サービス (bibliographical information service) という。²⁹⁾

また、読者の要求に適合する資料を選ぶという読書相談に属する事柄も多分にこのカテゴリーに含まれる。書

誌的情報を照合し、資料の所在を確かめ、脚註の真実性を確認したり、引用文の原典を調べたりする事柄もb項の外延に属する。

d. 一次以上の資料を網羅的に用いて、積極的に利用者の要求する直接情報を提供する場合。

これが情報サービスの特色である利用者の要求する情報そのものを供給する相であり、我々がめざすところの活動である。

従来から図書館員は、研究者の研究調査に対する援助として、特殊主題分野の文献利用の援助や情報の提供を行っている³⁰⁾が、レファレンス・ワーク自体は、研究調査と異なる³¹⁾という建前から、特殊な場合を除いては、研究調査に必要なデータを要約したり、解釈したりすることはしないていた。しかし、今後は、図書館員が教授・研究者のためにデータの発見から解明までの過程を手掛ければ、情報サービスは完全なものになり得ない。

実際に、特殊専門図書館においては、図書館員がこの種のサービスを行っている。この種の仕事に従事している人をドキュメンタリスト、あるいはインフォメーション・オフィサーと呼んでいる。しかし、図書館におけるサービス活動——特に、一連の情報サービス活動——の次元を高めることによって、従来は図書館サービス外の活動であったと考えられていたものも、図書館員が受持つ領域として拡大できるわけであるし、拡大しなければならない事柄である。特に大学図書館においては、今後、教授の研究調査面に対し、このような見地からサービスを強化する必要がある。

勿論、大学図書館でのこのようなサービスの実施について、そのあり方、実現性の問題などについては、次のような事柄を考慮しなければならない。

- (1) 図書館員の質的要素として

- (a) 主題分野の知識
- (b) 図書館学の高度の知識と技術の修得。ここには、ドキュメンテーションの範ちゆうに入る事柄も含まれる。図書館員の養成機関では、早急にこの種の要求に答えるための手段を講ずる責任がある。

- (2) 大学での研究調査の問題では、

- (a) 研究主題分野の分散度が、特殊主題分野の研究機関に比べて大きすぎる。それについては、経済的かつ効果的なサービス方式決定の問題が残されている。
- (b) 教授の人文・社会・自然科学など、それぞれの

研究分野の性格によって、サービスに対する要求の度合に粗密、緩急があり、必ずしも情報活動のペースがすべての研究分野に対して同一には行われ難い。

(3) 教授の研究調査に対する必要なサービスを実施し、維持するために行う必要な政策の決定。

(a) 人員、施設、備品、方式などについて。

(b) 文献情報資料の収集、整理、蓄積、提供の合理的方法。

(c) 経済性の問題など。

以上の諸点を検討し、援助計画を樹立することが必要となる。

Wyer³²⁾ のレファレンスの自由理論——Rothstein³³⁾ はこれをレファレンスの最大理論と呼んでいる——では、情報は多くの人々にとって最大関心事であるという見地から、研究者や学者にとっては、年々増加の傾向をたどる文献情報の中から「必要情報を得る」ことは、「必要なものを得る方法」を学ばねばならないことよりも重要なことである。年々文献情報量が指数函数的に増大して行くのに対し、教授・研究者個人が情報を得るためにあて得る時間は、あまりに増加する余地がなくなっている。彼等自身で文献探索のために費す時間を節約して、研究のための時間に廻すことができれば、彼等にとってプラスになる。文献情報探索の知識と技術を持った、その面での専門家である図書館員が「探索面」を受持てば、教授・研究者にとっては、それが貴重な時間の節約になるときは、図書館員の充実したサービスは経済的で、かつ価値があるといえる。

文献情報活動は、体面や趣味の問題よりも経済性、速度の問題が優先するので、専門分化の正常な状態を作らなければならない。大学において、教授・研究者は自己の研究調査の「研究面」に集中し、図書館員は教授研究者の研究調査に対する「文献情報探索面」を受持ち、自分の提供する情報の確実性に対しても、十分に責任を持つ事ができる識見と態度が必要である。そして、「レファレンス・ワークの最大理論は、信頼と能力という一対の信条の上に成立つ」³⁴⁾ のである。

Rothstein³⁵⁾ はレファレンス・ワークの三要素は、「図書館資料の利用法を教えること」、「図書を選択を指導すること」、「情報を提供すること」であるといっている。大学図書館では、学生に対して図書館資料の利用法を教えるという要素の割合いが大きい、今後は、教授・研究者に対する情報サービスを強化する体制を整え

る必要がある。

II. レファレンス機能の構造的要素

すでに考察したレファレンスに関連のある諸活動は、いずれもレファレンス機能に含まれるが、それらがどのような形で各種機能の中に表われてくるか、観点を変えて考察してみる。

A. レファレンス機能

Shores³⁶⁾ は、ALA の業務計画を整理して、レファレンス機能を管理・報知・指導・教育・書誌・評価の機能に六大別している。

大学図書館のレファレンス機能として最も大切なものは、情報供給と図書館利用教育の二機能であると Christoffers³⁷⁾ は述べている。

Wilson および Tauber³⁸⁾ は、図書館運用上便宜的に利用出来る資料を作る機能と教育機能とに分けている。

大学の目的に適合したレファレンス機能の分析を行うための一つの見方として、サービス対象別に機能を分類する方法がある。大学図書館において、対象別に機能を分類するということは、大学における教育面と研究面に対する機能をはっきり区別して考えるために特に必要なことである。単に Shores のような分け方だけでは、レファレンス機能の構造的要素を十分に分析することは困難である。

Wyer³⁹⁾ は、大学図書館のサービス対象のグループ分けを教授、学生、卒業生、地域社会としている。Lyle⁴⁰⁾ は、学部学生——カリキュラムに基づいて教育を受けている——大学院学生——教授の指導の下に特殊主題の研究調査に従う——、教授——学生に対する教育と専門主題の研究調査に従う——、部外者、とに分けている。筆者はそれに大学関係職員を付け加えた方がよいと考えている。

筆者⁴¹⁾ は Lyle の見方を導入し、しかも Shores の六機能とは別個の観点から表面的な対人的レファレンス活動を主体とする「活動的機能」と、レファレンスの表面活動を支えこれを推進させて行く「準備的機能」の二機能を考えた。

この二機能と Shores の六機能を組合せて大学図書館のレファレンス機能の構造的要素の分析を試みた。

その方法は、まず、六機能と二機能の組合せを作って機能領域を決める。次いで、各機能領域の業務内容に該当するものを ALA⁴²⁾、Hutchins⁴³⁾、Lyle⁴⁴⁾、Moore⁴⁵⁾、

別表 大学図書館のレファレンス機能

機能 I	対象		機能 S	管 理 的	報 知 的	指 導 的	教 育 的	書 誌 的	評 価 的
				1	2	3	4	5	6
活 動 的	学 生	学部学生	A		A _{2~5}				
		大学院学生	B		B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	
	教 授	学生の教育に従事	I		I _{2~5}				
		専門分野の研究に従事	J		J ₂	J ₃		J ₅	
	行政および管理職員		E		E ₂				
	その他の大学関係者		Z		Z ₂				
	部外(個人, 団体, 機関)		H		H ₂			H ₅	
準 備 的	レファレンス部門内		Θ	Θ ₁	Θ ₂	Θ ₃	Θ ₄	Θ ₅	Θ ₆
	上部管理者との関係		I	I ₁					I ₆
	館内他部門, 分館との関係		K	K ₁					K ₆
	学内諸部門, 機関との関係		A	A ₁					A ₆
	部外(個人, 団体, 機関)		M	M ₁				M ₅	

Wilson-Tauber⁴⁶⁾ らの考えを, 筆者の過去の経験を生かした上で, Shores の機能内容を主体に纏めたものである。(別表参照)

B. レファレンス機能の構造的要素

別表に示されたレファレンス機能を構成する要素を対象別に分析することにする。対象のグループによっては, 機能Sは互いに独立した範ちゆうに分離し難いものもあるので, 重複し, 密接な関連を持つ機能は, 非独立機能として一緒に取扱うことにする。

1. 学部学生に対する機能。

a. A_{2~5} 報知・指導・教育・書誌的機能をそれぞれ

単独に分離して考えることは困難であるので, 関連づけて取扱う。

(1) 直接または電話により, 即座に答の出せるレファレンス質問に解答する。

目録の利用, 目録から資料を選ぶ助言・援助, レファレンス・ルームおよび図書館で利用できる資料に関する助言, 図書館の利用規則や手続きの説明, キャンパス・大学近辺の案内的情報提供などの情報サービスが含まれ, 2), 4), 7), 8)などと関連づけられて行われることが多く, 特に 7) との関連づけは不可欠な事柄である。

(2) 学生の図書館利用を援助する。

大学図書館におけるレファレンス機能の構造的諸要素の分析

(3) 特殊収書のガイドを作って、それらの利用を促進させる。

(4) 図書館資料およびその配列についての説明を行う。

(5) 学生が特に興味を示す図書に関して情報を与える。

(6) 読書リストの編集と配布。

(7) レファレンス資料およびレファレンス方法についての事項を含めた図書館利用の教育。

公式および非公式な教育がある。前者は、図書館利用について単元を設けて、クラスまたは他のところでグループに対しレファレンス・ライブラリアンがそれにあたる。後者は、グループまたは個人に対し、レファレンス質問を通して目録・索引・抄録・書誌およびその他のレファレンス・ブックの利用法の教育とオリエンテーション時に配布される図書館利用の手引きの編集などもここに含まれる。

(8) 参考文献、書誌的脚註などの記入形式に関する知識の教育・指導。

この事項は、大学によっては英語科の課程「論文の書き方」のコースで教授が学生に指導するが、その場合も、レファレンス・ライブラリアンが教授に協力している。

(9) 必要資料の複写および入手

b. 学部学生に対するレファレンス機能の特徴。

学部学生に対するレファレンス機能は、理論的には構造的要素に分離できるが、実際面においては、それぞれ密接な関連を持ち、分離することは困難である。機能として報知・指導的なものは教育的機能に従属するものである。学生のレファレンス質問に対しては、特殊な場合を除いて必要な文献・情報を図書館員が直接に解答として与えることはせずに、レファレンス・ツールおよびレファレンス方法を教えながら学生と一緒にどのような過程を経て必要資料・情報を探索するかを指導し助言を与えながら答えるのである。学生が自分の欲しいものを自分で捜すことができるように導くのが、大学図書館における最も大切なレファレンス機能である。大学図書館においては、学生の「自己教育」を助ける教育機能が優先され、この機能を最大限に生かすよう報知的、指導的機能が行われなければならない。この点が公共、専門図書館のレファレンス機能と著しく異なるところである。教育的機能優先の見地から新入生に対する図書館利用のためのオリエンテーションの実施、図書館利用の手引きの準備、

教室でのグループ指導、さらにレファレンス・デスクでのレファレンス質問を通しての個人的な学生に対する援助と指導というように、学生の教育指導が一連の動きとして行われなければならない。よく「余り学生に親切にレファレンス援助を行うと学生は怠け者になって反教育的効果をもたらすものではないか」ということばを耳にするが、学生に対するレファレンス機能が何が大切であるかを知れば、これに対する解答は与えることができる筈である。もし、このような疑問が起る業務活動を行っているとしたら、即刻正常な業務活動を実施するよう努めるべきである。

カリキュラムに関連する読書指導の問題は、すでに述べたようにリザーヴ・ブック制度と関連して行うべきであって、レファレンスの指導的機能で取扱うのは誤りである。レファレンスで扱うのは、カリキュラムに関連を持たない分野の読書指導についてだけである。

2. 大学院学生に対する機能

a. B₂(報知的)

(1) レファレンス質問に答える。

学部学生と異って専攻主題分野に関連した質問および書誌的質問が多い。文献情報探索方法やレファレンス・ツールについての指導、助言も並行される場合が多い。

b. B₃(指導的)

(1) 特殊収書のガイドを作り、その利用を促進させる。

(2) 印刷資料の抄録および書誌の編さん。

c. B₄(教育的)

(1) グループに対し、クラスまたはその他で図書館資料の利用法について程度の高い教育を行う。

(2) 主題分野別の書誌的ツールを教える。

書誌的ツールを通して速かに主題分野の基本的文献を知ることができる。書誌的ツールには、書誌的ガイド、書誌の書誌、抄録、概要、特殊索引などの種類がある。

(3) 大学院学生および教授のための図書館ハンドブックの準備。

d. B₅(書誌的)

(1) 研究資料の複製および入手。

3. 学生の教育に従事する教授に対する機能。

この機能は、A と表裏一体をなすものである。

a. Γ_{2~5}(報知・指導・教育・書誌的)

(1) 学生に対するレファレンス援助の性格について知るために教授と相談する。

(2) 学生が課題を行い、ターム・ペーパー、卒論を書

くために必要な書誌の出典、その探索方法およびその他の問題解決に必要な資料の使用について教授と相談する。

(3) クラスで教授が学生の教育に使用するための書誌の作製および提供。

4. 専門分野の研究調査に従事する教授に対する機能。

a. D_2 (報知的)

(1) 教授のレファレンス質問に答える。

I' に関する事項も取扱うことがあるので分離し難い場合もある。質問の性格・内容は、資料の所在に関する質問が多く、専門分野の事項については、尋ねたがらない。

情報提供は、書誌の質問として取扱われる専門分野およびその周辺の文献利用の援助が多く、書誌情報サービスが行われる。

b. D_3 (指導的)

(1) 特殊収書に対するガイドの作成。

(2) 印刷資料の抄録作成および翻訳。

この業務は、ドキュメンテーションの範ちうに入るので、図書館員の専門分野の知識に加えて、従来より広範囲の情報処理・提供に関する知識・技術の修得が要求されている。抄録作成について言えば、単に専門分野に対する深い知識を持っているだけでは不十分である。一次資料の持つ情報内容を解析要約する観点のみからの抄録作成が行われるだけでなく、必要情報が蓄積された中からでも迅速に検索できるように、読む抄録と同時に、細分された情報が検索できるように抄録、すなわち、情報流通を迅速化させる抄録作成の高度の知識・技術が必要とされて来ているのである。

c. D_5 (書誌的)

(1) 特殊主題分野およびその周辺の専門書誌の作製・提供。

(2) 特殊主題分野およびその周辺の文献利用の援助。

(3) 研究資料の複製の準備。

図書館間相互貸借、または複写による資料の入手などのサービス活動の照合も含まれる。

5. 大学の行政および管理職員に対する機能。

a. E_2 (報知的)

(1) レファレンス質問に答える。

情報サービスが行われることが多く、既存資料から情報を抽出して提供するだけでなく、調査を行ってデータを作製しなければならない場合も多くある。特に人物の経歴、団体・機関、施設などに関する情報を要求する質

問が多い。書誌作成も時には行う。

6. その他の大学関係者(各部局事務室、事務・技術職員)に対する機能。

a. Z_2 (報知的)

(1) レファレンス質問に答える。

業務に関連する事項は、直接情報を提供する。図書館は、大学における情報センターとして、大学の目的遂行のために間接的業務に従事している一般職員に対して、彼等の要求する必要情報を支障のない範囲で提供することは必要である。(むしろ日本の現状においては、一般職員が図書館業務に対し、また図書館員に対して正しい認識と理解を深める意味からも特に必要であると言えよう。)

7. 部外の個人・団体・機関に対する機能。

a. H_2 (報知的)

(1) レファレンス質問に答える。

文書、電話による質問が多く、このグループには、卒業生、教職員家族も含める。Lyle は訪問教授をこのグループに入れている。回答内容は、個人・団体、国内・国外、一般人・専門家などによって全く異ってくる。時によっては、相当の調査を必要とすることもある。

b. H_3 (書誌的)

(1) 複写資料の提供。

(2) 書誌の作成。

以上の各項目は、利用者に対して表面的に現われてくる対人的レファレンス活動、すなわち活動的機能である。以下、各項目はレファレンスの表面活動をささえ、それを推進させて行く潜在エネルギーと考えることができる準備的機能について述べる。

8. レファレンス部門内の準備機能。

a. θ_1 (管理的)

(1) レファレンス政策の決定。

(a) サービス組織。

(b) サービス対象。

(c) グループおよび個人に行うサービスの範囲・種類。

(d) レファレンスに関する諸規定。

(e) レファレンス・ブックの選択・収集。

などに関するものが政策として決定される。

(2) 施設・備品の管理。

(3) 人事管理。

係員の配置、業務分担、研修の実施などを含む。

(4) 部門スタッフ・マニュアルの整備。

(5) レファレンス資料、情報資料の収集、組織。

大学図書館におけるレファレンス機能の構造的諸要素の分析

大学の要求に適合したレファレンス資料を発展させ、効果的に利用できる情報資料を収集し、組織化しなければならない。そのために要求の方向を迅速に検知する態勢を備えておく必要がある。

(6) レファレンス・ワークの処理に対する管理。

(7) 利用者の状態についての研究・調査の実施および調査ファイルの作製。

(8) 保存を要する記録および統計の点検、整備。

(9) レファレンス・サービスに関連する文書通信の管理。

(10) レファレンス部門に関する報告書作製の準備。

b. Θ_2 (報知的)

(1) レファレンス質問の分類・分析。

レファレンス質問に対する処理を十分に行うために質問を記録し、それらを主題、タイプ、質問目的、形式、利用者、参照した情報源、検索過程など必要項目、要素別に分類し、分析することが必要である。この業務は Θ_6 に関連を持つものである。

(2) 教授と学部学生に対するレファレンス援助の性格を知るために相談する。

この業務は、 Γ_2 の業務でもある。この業務を効果的にするために各教授の講義概要並びにコース・オフリングを入手してシラバスの研究を行うことが必要となる。

(3) レファレンス質問に備えて各種の情報ファイルの作製、管理。

ファイルの現時性を維持し、各種のディレクトリーを作製する事柄も含まれる。

c. Θ_3 (指導的)

(1) 利用者の読書興味や図書館資料の利用を促進・刺激するために展示を行う。

展示は、宣伝のためのものと、一般的に重要な情報資料として知らせるためのものとがある。

(2) 新着図書リストを用意する。

一般図書については、必ずしもレファレンス部門で行わないが、新着レファレンス・ブックについてリストの準備と展示を必要とする。

(3) レファレンス資料およびその他の資料の書評を書く。

(4) レファレンス資料の索引、抄録の作製。

(5) 翻訳サービス。

d. Θ_4 (教育的)

(1) オリエンテーションの手引の作製。

(2) 個人およびグループに対し図書館の利用、レファレンス資料の利用、およびレファレンス方法、検索方法の指導・教育に対する準備。

(3) 教授と学生が行うターム・ペーパー、課題、卒論を書くために必要な書誌的出典、探索方法およびその他の関連事項について相談する。

e. Θ_5 (書誌的)

(1) 特殊主題に関する書目、研究調査に役立つ書誌を能動的に準備する。

(2) レファレンス処理に必要なサイテーション・カードの作製。

(3) 特殊資料の索引、リスト、書誌編さんなどの準備をする。

(4) 教授の出版物、論文をリストする。

(5) 利用者から要求のあった資料について図書館相互貸借、あるいは複写サービスによって供給できる経路を設定しておく。

f. Θ_6 (評価的)

(1) レファレンス・コレクションを常に発展させて行く。

(2) レファレンス資料について正しく評価できる知識と、それらの入手・収集に関する知識を深める。

レファレンス質問を分析評価した結果が、この面で大いに活用されるのである。

(3) 図書やその他の諸資料を読み、評価して、一般的な図書館資料の選択を助け、受入れ資料についての推せんを行う。

(4) 各種切抜きやパンフレットのファイルに絶えず手を入れて現時性を保つ。

(5) 大学の出版物で失われ易いものを保存する。

(6) 地域的、国内のおよび海外の図書館資料・情報を蓄積する。

9. 上部管理者に関連する機能。

a. $I_{1,6}$ (管理, 評価的)

(1) レファレンス政策決定に際する打合せ、相談、指示を受ける。

(2) レファレンス部門スタッフ・マニュアル作製についての相談、指示を受ける。

(3) レファレンス部門に関するいっさいの記録・統計、報告書および覚え書きを準備し、定期的あるいは必要に応じて提出する。

レファレンス機能全般については、ここで再評価される機会を持っている。

10. 館内他部門, 分館に関連する機能。

a. $K_{1,6}$ (管理・評価的)

(1) 館内の各部門, 係とサービスを発展させるために連絡調整を図る。

図書館資料選択に対する受入れ部門に対するアドバイス, 検索ツールとしての有効度を高めるような閲覧目録に対する示唆を整理部門に与えたり, 特殊資料の組織化の問題など数多くの問題がある。これらについては, スタッフ・ミーティング, あるいは覚え書きで連絡調整を図る。

(2) レファレンス・サービスについて分館と連絡, 調整を図る。

レファレンス・コレクションの範囲, 重複の度合に関する調整, 利用者に対するサービス範囲の調整連絡などについて, 特に緊密な連絡を必要とする。

11. 学内諸部門, 機関に関連する機能。

a. $A_{1,6}$ (管理・評価的)

(1) 学内の諸会合, 活動に参加する。

学内の学生, 大学を問わず参加できる会合, 活動に参加して有効なレファレンス・サービスを行うための知識を持つことが必要である。その他レファレンス・サービスに多大の影響を与える各種会合の結果については, それらに出席する館長を通じて伝達される。また一方レファレンス・サービスの状況については, 館長から年次報告が提出, 配布され, ある場合には会合の席で関係者に必要事項が伝達される。

(2) よいレファレンス・コレクションを作るために特殊主題分野の資料について, 教授および教育部局と相談する。

12. 部外の個人, 団体, 機関に関連する機能。

a. M_1 (管理的)

(1) 個人, 他の各種図書館, 類縁機関などとの協力活動を促進し, 協力がなされていない面を開発する。

(2) 部外の各種会合, 会議, 活動などに出席, 参加して図書館の発展に遅れないようにする。

b. M_5 (書誌的)

(1) 図書館相互貸借, 複写サービスのための書誌的照会。

(2) 地域的・全国的な総合目録, 書誌センターなどの書誌計画への参与。

以上各機能について, その構造的諸要素を考察したが, 図書館学の研究が進み, 図書館サービスが拡大充実されれば, 要素がさらに増加して行くのは当然である。

理想的なレファレンス・サービスを実施するため, さらに開発すべき技術・知識が残されている。

む す び

レファレンス機能の構造的諸要素を分析して, その機能を静的に考察したが, 次の段階としてはレファレンス・サービス機能を動的にとらえる過程的考察のための観察が行われなければならない。そして初めて観念的, 時間的, 量的なレファレンス機能の統一・総合把握が行われたことになるのである。

また, 構造的要素のうち, いかなるものが優先されるか, 順序づけの客観性を与える量的表現の尺度化の問題が, 大学図書館の場においても今後の研究課題として残されているといえる。(東洋レーヨンKK企画第2部)

- 1) Rothstein, Samuel. "Reference service; the new dimension in librarianship," *College and research libraries*, vol. 22 (no. 1), Jan. 1961, p. 12.
- 2) *Loc. cit.*
- 3) American Library Association. Board on Personnel Administration. *Descriptive list of professional and nonprofessional duties in libraries*. Preliminary draft. Chicago, 1948. p. 57.
- 4) *Ibid.*, p. 57-60.
- 5) Rothstein, Samuel. *The development of reference services through academic traditions, public library practice and special librarianship*. (ACRL monographs, no. 14) Chicago, Association of College and Reference Libraries, 1955 p. 4.
- 6) A. L. A., *op. cit.*, p. 57.
- 7) Rothstein, *op. cit.*, p. 4.
- 8) 井出翁. "大学図書館のレファレンス機能について," 私立大学図書館協会会報, 27, 1959, p. 10.
- 9) 北島武彦. "大学図書館のレファレンス・サービス——実態調査報告——," 図書館学会年報, vol. 5, no. 2, 1958, p. 103.
- 10) Wyer, James I. *Reference work; textbooks for students of library work and librarianship*. Chicago, A. L. A., 1930. p. 6-7.
- 11) Rothstein, "Reference service," *op. cit.*, p. 14.
- 12) University of Washington. Bureau of Government Research and Services. *Changing patterns of reference service; proceedings of the section on university and public library administration, 17th annual institute of government*, 1952. Seattle, University of Washington.

1953. p. 8.
または、井出翁訳、変貌するレファレンス・サービスの様式。東京、日本私立大学連盟、1960(第4回図書館研究集会参考資料) p. 5.
- 13) Downs, Robert B. “参考奉仕の精神” [The spirit of reference service] 木寺清一訳、*図書館界*, vol. 13 (no. 1), 1961. 5, p. 8.
- 14) Rothstein, *The development of reference services*, *op. cit.*, p. 22.
- 15) A. L. A., *op. cit.*, p. 61.
- 16) Rothstein, “Reference service,” *op. cit.*, p. 12.
- 17) 志智嘉九郎. レファレンス——公共図書館における実際——. 東京、日本母性文化協会、1954. p. 24-25.
- 18) 佐々木重雄. 新制度の大学教育と単位制度. <大学基準協会. 新制大学の諸問題. 東京, 1957> p. 256-257.
- 19) *Ibid.*, p. 259.
- 20) Wilson, Louis R., *et al.* *The library in college instruction: A syllabus on the improvement of college instruction through library use.* New York, H. W. Wilson, 1951. p. 283.
- 21) Branscomb, Harvie. *Teaching with books: A study of college libraries.* Chicago, A. L. A., 1940. p. 54-101.
- 22) Lansberg, William R. “Current trends in the college reserve room,” *College and research libraries*, vol. 11 (no. 2), Apr. 1950, p. 120-124, 136.
- 23) Shores, Louis. *Basic reference sources.* Chicago, A. L. A., 1954. p. 10-11.
- 24) Wyer, *op. cit.*, p. 5.
- 25) Rothstein, *op. cit.*, p. 12-13.
- 26) *Oxford English dictionary*. 1933. V. p. 274.
Webster's new international dictionary of the English. 2nd ed. 1952. p. 1276.
日本図書館協会文献情報活動委員会. ドキュメンテーション用語集. 東京, 1960. p. 75.
- 27) 井出, *op. cit.*, p. 4-5.
- 28) Rothstein, *op. cit.*, p. 14.
- 29) 高宮秀夫. “大学図書館におけるレファレンス機能の本質に関する一省察,” *早稲田大学図書館紀要*, no. 1, 1959. 2, p. 126.
- 30) 井出, *op. cit.*, p. 6.
- 31) Hutchins, Margaret. *Introduction to reference work.* Chicago, A. L. A., 1944. p. 16-17.
- 32) Wyer, *op. cit.*, p. 9-13.
- 33) Rothstein, *op. cit.*, p. 14.
- 34) *Loc. cit.*
- 35) *Ibid.*, p. 13.
- 36) Shores, *op. cit.*, p. 2.
- 37) University of Washington, *op. cit.*, p. 7.
- 38) Wilson, Louis R. and Tauber, M.F. *The university library; the organization, administration, and functions of academic libraries.* 2nd ed. New York, Columbia University Press, 1956, p. 214-215.
- 39) Wyer, *op. cit.*, p. 189.
- 40) 井出, *op. cit.*, p. 45.
- 41) *Ibid.*, p. 10.
- 42) A. L. A., *op. cit.*, p. 57-66. および A. L. A. Board on Personnel Administration. *Classification and pay plans for libraries in institutions of higher education.* 2nd ed. Chicago, A. L. A., 1947. vol. 3, p. 80.
- 43) Hutchins, *op. cit.*, p. 16-17.
- 44) 井出, *op. cit.*, p. 9. および
私立大学図書館協会関東部会研究部 閲覧参考分科会. “パネル・ディスカッション——大学図書館のレファレンスの実際——,” *私立大学図書館協会会報*, 23, 1958, p. 45.
- 45) アメリカ図書館研究調査団. アメリカの図書館. 東京, 1960. p. 74.
- 46) Wilson and Tauber, *op. cit.*, p. 214-215.